

日本書紀傳三十卷七

和書
一〇五二二號

百九

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (118)	
函號	特85	1

海内公八三號



文庫部印

文庫部印

文庫部印

初事と成れりけり又其先格小従事と成れり
 小至れり如く大己貴神御上外事注了
 の事迹小於てハ獨以八洲田より非了天下
 外蕃の末に迄ハ推し行ハ何れ其傳ハ非了云事
 有ハ然れども右ハ注セバ如き予ハ始めたる事
 及ハ大八洲田ハ在ハ外蕃の事ハ猶千重ハ一
 小傳ハ然る古傳ハ少ハ非れども強ハ其必
 推量を以て上世の事を定云ふハ其真ハ成
 正ハさる者ハ然れハ坊上ハ其後ハ彦名命往至熊野之
 御崎遂適於常世郷矣と書ハれ且大倭神社注進状ハ
 引ハ神記大己貴命田野文ハ今我當於百不足之ハ
 限將隱去矣言訖即躬被瑞之八坂瓊而長徳帝世郷者
 矣と有ハ文徳天皇実録ハ二神ハ東海ハ入て説ハ御
 坐ハ余有ハ中て其外蕃を馭戎させ御在ハ坐ハ御

○日本書紀傳三十一

○三百六十二

卷一六八三號

事ハ見奉リ知ル可クナリ然レバ然ル隠雜物無クハ
我ハ古説を以テ正シク直ク注シ奉ルハ本意
有ル事ナシ ○遂到出雲国ハ地神本記ハ遂到出雲国
五十狭狭之少汀而ト見え火^大三輪神三座鎮座次第ハ
ハ遂到出雲国五十狭ハ小汀ト有テ少ク小作れリ
以下ハ初大己貴神之平国也行到出雲国五十狭ハ
之小汀而云々有テ以テ以前ハ其少彦名神ハ初
テ依来^テ也御在^シ坐^ケ海濱是^ル古事記ハ以テ
同ト傳ハ有^テ雖^モ其何方ハ御在^シ坐^ケ御事トハ
知^ルれざる也右ノ二書^共ハ其地名を注ス事實ハ大
ふる賜物ト云ベク^ル有^ケり以テ地ノ事下^{七百六十一}

今昔が若くハ古事
記ハ其名神ハ依
御在^シ坐^ケ地を
出雲之御大之御前
ハ其ハ以テ幸魂
神ハ依^テ給^ハ其
地^ハを互^ニ相替^フ
傳^ハル^ル有^ル

注テ可^ク今^ノ傳^ハ以^テ上^ノ件^ハ委^曲ハ注^シ奉^ルガ如^ク以^テ大神
后神及諸御子等を率^テ也御在^シ坐^ケ國^ニを造^リ巡^ル
也給^ヒ其御政を移^メ如^ク率^テ也御在^シ坐^ケ其神
都^ル宇迦山本宮ハ還^リ御在^シ坐^ケ御時^ノ御事ハ
りければ其少彦名命^ノ常世郷ハ渡^リ也御在^シ坐^ケ
後幾百千年を^テ短^ク日^ニ給^ヘり^ハ實^ニ久^シ間^ハ
御事ハ^ハ御在^シ坐^ケ然^ルハ同^ク處^ニ久^シ
ハ^ハ又^ハ一度^ハ功^を奉^ル給^ヘり^ハ國^ニ有^ルハ^ハ
再^ニ三^ニ事^成給^ヘり^ハ地^ニ有^ルハ^ハ又^ハ其^ノ功^成後^ハ
山川河海^ハ位^置を改^メ給^ヒて數^回の^後國^土
之^レ成^レ有^ルベ^ク其^ノ御^事ハ^ハ原^ノ御^在坐^ケ御^事
有^ル状^ハ今^ノ世^ハ大^ニ名^ハ如^ク成^レり^ハ國^を治^ル
む^ル事^ハ其^ノ事^ハ若^クハ^ハ况^ハ荒^カ茫^カ其^ノ

今奉以討不服
有荒俗之荒振人
云と訓之又

田土を治平けて作成し給ひけい其功勞程ハ
如何小甚トき御事ハ街在し坐なりけい御小
事ハ猶余有御事 ○興言曰ハ妖字四神出生章第六書
小見えたり傳十三百十十八二十廿三二十小己小注
セウ○本自ハ金澤本小母登典理と訓り○荒芒ハ私
記小阿良比太里と訓り金澤本ハ阿良比太里と訓り諸妖事ハ天孫降臨章ハ被地
多有螢火光神及蠅声邪神と有る小当りて其第二書
小語中ハ残賊強暴横惡之神者と有る是あり其事を
古事記街天降段ハ道速振荒振神等と書されたり
荒振ハ妖荒芒と同言あり崇神天皇十二年御記ハ景行天皇御記廿
五年小 惡神四十年小暴神又荒神ふとの字を荒振

神と訓之祝詞ハ荒振神ハ字を用ひさやたり若て
妖荒ハ本ハ和ハ對ふハ其ハ岐ハ饒ハ豊ハふる
意阿羅ハ散ハ跡ハの語ハ記傳三十七二ハ其説有
り妖和荒ハ種ハの意有て荒金荒玉ふとの類ハ物の
生れり仕りて未修治を加へぬを云ふ其小對へて修
治たり物を和某と云ハ和縮荒縮あり是あり妖ハ生
熟ハ意あり又物の麿きと精進きとを云ハ強きと
柔ハふとを云ハ又人家ふとの荒るると饒ハふ
又浪風の騒ぐを荒ると云ハ静るると和ハ云ハ神
ハ心ハふる荒ると云ハ和いと云ハ諸又物の間隙ハ

古神の御許小速ハ遣給ハけレ具ヨリ御父大神
の御所ハ奉出シ給ハけレ其御有状を試ス也給
かハ為ス小ハ御在シ坐ケレハ甚シ辛ク御事共
を成シ進メ也給ハて竟テ御身自殺シ進メ也給ハ
許ハ懲リ進メ也給ハけレ御ハ退キ給ハて悉ク不堪
也御在シ坐ケレハ漸ク御心小愛シ思ハレテ御
寐坐リ時を伺奉給ハて具后神を相伴ス御在シ坐
けレ時小御父大神の追及進メ也給ハて遠望謂ハ大穴
宇遲神曰其汝所持之生大刀生弓矢以而汝鹿兄弟者
追ハ伏坂之御尾亦追ハ撥河之瀬而意礼ハ大田主神亦有

宇都志国玉神云々而居是奴也故持其大刀弓追避
其八十神之時每坂御尾追伏每河瀬而始作田也
見え又大倭神社注進状小傳聞八千戈神者大己貴命
以廣矛為杖令撥平豐葦原中田之邪鬼是時大己貴命
号曰八千戈神と有て当昔邪神茨鬼の世小多在
ウハ即岐神の御魂を託タ平田之廣矛をハ
杖歩ク御在シ坐ケレハ悉ク退治ス也御在シ坐ケレハ
御事ハ傳十八五十九引ル御牧望月大伴神社小大
己貴命以廣矛天八重雲袁押ス天ハ地ハ翔行ス天下
表睨巡給ハ氏東国之五月蠅声如殒邪神乎神拂ル拂手

賜而云云と有ると何れ小傳のれり同し趣あり其
即以小謂ゆら夫葦原中国本自荒芒と云は是なり其
田之廣牙ハハ岐神の御形あり由ハ天孫降臨章小
就て傳三十一卷百下注ハ奉り可ハ岐神
ハ大神と共ハ天下を周流り給へり然ハ邪神
其鬼ハハ黄泉田ハ属り者あり故ハ其神ハ御由
ハ得り給へり ○磐石草木ハ四神出生章第八一書小
石礫樹草と有ハ同トクハ伊波牟良伎久佐と訓ハ
きあり其説ハ己ハ傳十一ハ注ハハ若ハ天
孫降臨章ハ多有螢火光神及蠅声邪神と有ハ並ハ
復有草木咸能言語と有ハ其下ハ一云二神遂誅邪神
及草木石類と注ハハ其第六一書ハ葦原中国者磐根

木株草葉猶言語夜者若燦火而喧響之書者如五月蠅
而沸騰之と有ハ更あり欽明天皇十六年御記ハ天地
割判之代草木言語之時云云と有ハ此事を書ハハ
ハハ祝詞ハハ大殿祭詞ハ天津御量氏事問之磐
根木根立知草能可岐葉言止ハ大夜詞ハ語問志磐
根樹立草之垣葉語止ハ比却崇神祭詞ハ語問志磐
根樹立草之片葉語止ハ又出雲国造神賀詞ハ石根
木立青水沫事問天荒田在ハハ有ハ草昧ハハ
ハ往昔ハハ然ハ磐石草木ハ至ハ迄ハ妖氣有ハ静
安ありさうけり己ハ小ハ大己貴神の御言向ハハ

御在_レ坐けるを後_ニ経津主神武甕槌神の天降り御
在_レ坐て退治給ひ_テ今_ノ顯世の状と成れ
かけれども其大抵_ハ大己貴神の摧伏せて和順_ハ給
ひ_テ其天神の御使_ハ猶背き奉る如き_ハ己不
以大神の御為_ハ其御馭めを仰ぎ奉る御事と成れ
り_テ右の事共の再度有_ガ如く_ハ傳_ハれ_ル者_ハ
かり_テ漢籍春秋左氏傳昭八年の_下石言_テ于晋魏榆
焉_ニ有_ル杜注_ハ有_ル精神_ト馮依_石而_言と有_リ又_ハ法苑珠
林_四十三卷_ハ孔子曰_ク吾聞_ク物老_則群精_依之_六畜_之物
及_ニ龜_草木_之者_神皆_依馮_能為_ニ狀_怖故_曰之_五酉_酉者_老
也_故物_老則_為怪_矣又_五十八卷_ハ抱_朴子曰_ク山中_大樹
能_語者_非樹_語也_其精_名曰_雲陽_以其_名呼_之則_吉山中
夜_見胡_人者_銅鐵_精也_見秦_人者_百歲_木也_云事_見中

○強暴ハ私記_ハ之_非安_只加留_ト訓_之金澤本_ハハ阿
斯阿斯加流_ト訓_リ雖_ハ古本_ハ阿斯加流_ト訓_ハ不_レ
從_ハて威能強暴_ハ四字_を合_{せて}悉_ク皆_惡在_レ神理_ト
訓_べ一_万葉_十四_トハ_ハ安_之保_夜麻_安志_可流_登我_毛
左_祢見_延奈_久尔_十五_トハ_ハ於_毛比_都追_由氣_婆可_母
等_奈由_伎安_思可_流良_武ふ_ど有_ハ共_ハ惡_在レ_レ義_ふ
者_ふり_猶瑛_珠盟_約章_ハ素_知其_神暴_惡ハ_有る_暴惡_を
阿_良久_阿斯_伎と_訓る_るども_ハ以_ハ同_トく_且以_強暴_ハ
字_を天_孫降_臨章_第二_一書_ハ殘_賊暴_強橫_惡之_神と
云_所ハ_用ハ_レ景_行天_皇四_十年_御紀_ハ朕_聞其_東夷

也識性暴強凌犯為 宗村之無長邑之勿首各食封塔
 並相盜略亦山有邪神郊有鬼遮衢塞徑多令若人
 見えたる暴強の二字に強暴と其箋異ふらざりけれ
 右小續けり文共を合せて其大凡の状を思ふ可き
 者ふりり又其下小ハ即巧言以調暴神振武以攘其
 鬼之有り楮以荒振神の荒芒事と磐石草木の言
 語を為す一速ふり世中の状を咸能強暴の宣
 給へるふり纂疏小本石強暴謂雖為無情草木皆其精
 靈依之也と注させ給へる實小然る言ふり 諸右の私
記の訓ハ
強字と暴字とを一に訓たしして事の委しく有れ
ど古言の状ハ非ず金澤本ふりハ惡い在此重云

今將賜伏し
 如是而平伏新羅
 云々平伏の言
 あり

羨ふらめど猶如何がや思つ又以阿斯加流を何自
 加流之濁音小訓む事世の常ふら元より非事ふ
 外討強暴の有り ○吾己の己ハ悉の羨ふ事傳十
 三九十八 四十五 二十 七 小注せり ○推伏私記小久
 陀記不西天と訓り即降伏と 云次三三三小引播上記ハ 同トク可一即以
 ハ古事記八十神段小其汝所持之生大刀生弓矢以而
 汝庶兄弟者追伏坂之所尾亦追撥河之瀬而意礼為大
 田主神云々故持其大刀弓追避其八十神之時每坂所
 尾追伏每河瀬追撥而始作田也と所見たる追伏又ハ
 追撥ふり小等ハ荒振不惡ハ田神等と言向已也
 所在下坐て其執を打折トキ取控き給ひて彼八十文

神と称奉る所功用の全く成調り也所在一坐下所言
を宣ひ出さず也所在一坐けり小ふむ有り古事記序
小降旗耀兵凶徒瓦解と有る小似たり事あり但以指伏
も通證小華嚴経推伏一切諸怨敵と有る併経小出た
る事おが其梵語を譯するハ漢土小後未有表れ
る熟字を用ひたる者あり其熟字小在る程の言ハ
る事共ありけれ其小當へき語無てハ得有へり
古言あり事云小更あり ○莫不知順ハ私記小万津
呂王殞止以不已止奈之と有り故以和順ハ荒芒の反
對あり天孫降臨章小二神誅諸不順鬼神等云一云
二神遂誅邪神及草木石類皆已平了其所不順者唯星
神香ハ背男耳故加遣倭文神建葉推命者則順云

有て以小順也小順也小訓り其第一二書小故経津
主神以岐神為郷尊周流別平有逆命者即加斬戮歸順
者仍加褒美是時歸順之主渠者云又神武天皇戊午
辛御紀小饒速日命本知天神慙慙唯天孫是與云帥
其衆而歸順焉と有る以等小歸順の字を訓り古事
記小百檮原宮段ハ故以言向和荒夫琉神等退撥
不伏人等而と有る記傳十九八下小不伏人ハ麻都漏
彼奴比登と訓べし水垣宮段小令知平其麻都漏波奴
人等倭建命段小言向知平東方十二道之荒夫流神及
麻都 檮波奴人等又同段小平東西之荒神及不伏人

悉く小召順ひさせ御在り坐す謂是ふが己小傳十九
卷小條に小注し奉るが如く大田主神を申奉るが田
々各其田主神に有りたるを統領めさせ給ふ由なり
又田作大己貴命を申奉るが處に小在り所の田作神
を率て田作の御功を成し給へる謂ふ其和魂を大
物主神に申奉るが天孫降臨章第二書に是時帰順
之首渠者大物主神及事代主神乃合八十万神於天高
市帥以昇天陳其誠疑之至時高皇產靈守勅大物主神
略宣領八十万神永為皇孫乃使還降之見えたる是
即其八十万神の惣督と為る万の物を七事とし以

攝は領知めす義あり又其荒魂を大田魂神に申奉れ
るが垂仁天皇二十五年御紀の下の載れり倭大神の
御言小我親治大地官者に詔給へる是各田小田魂神
と云ふ有る其天下小在り有る限を主宰り御在り
坐を以て大田魂神と稱奉れりあり又等小御事共
一二を以て小田大己貴大神の御後威の程の世
小真盛小御在り坐て磐根木立草の末迄心仰き諸
伏し靡き順ひし奉れり御事を見奉り知へき者なり
谷重遠説小大己貴命虽失女彦名之輔曾不亦屈獨降
狀諸田莫敢不服因自賛功業之盛矜誇大言旁若無人
其氣象可想焉云々然事おが如以云々意味
ハ後世武夫猛將の天下を帥る者と同し状小見たる

千口大刀者藏于忍坂邑然後從忍坂移之藏于石上神
宮是時神乞之言春日臣族名市河令治因以命市河令
治是今物部首之始祖也有て以令治有て右
同意有て者有て又履仲天皇五年御紀於筑紫所
居三神見于宮中言何奪我民矣吾今慚汝於是禱而不
祠中天皇狩于淡路島中俄而使者忽来曰皇妃薨天皇
大驚之便命駕而歸焉中既而天皇悔之不治神案而亡
皇妃更求其咎下有不治神案上小禱而不祠也
有是有是亦祠事治云右例小異有
了又播磨風土記息長帶日女命欲平新羅国下坐之

時禱於衆神尔時因堅大神之子尔都都比賣命者因造
石坂比賣命教曰好治奉我前者我尔善驗中如是
而平伏新羅已託託還上乃鎮奉其神於伊国管川藤代
之峯見えた是上好治奉我前有下鎮
奉其神有右等治天下所知者也給小御
政の專要ハ神祇を祭祀と也給小御事を大御政の本
根ハ為こ也御在坐了御事を治ハ云る小て以ハ
下り上小仕奉を云列共有り記傳十二卷十四下
何を如以問給小答小祭狀也如何也小散へ不し
唯果然小祭礼也の教給小思へ上小治我
前に有治小必し社を造て祀事小限れ不し
ハ非ず故小奈何不狀小治がむと問給小借答小治

其第... 入等... 治賜... 止... 白... 子... 又... 幸... 治... 子... 育...

云... 又官位... 給... 事... 治... 云... 其第... 詔... 故... 如... 以... 之... 狀... 予... 聞... 食... 悟... 而... 歎... 將... 仕... 奉... 人... 者... 其... 仕... 奉... 良... 年... 狀... 隨... 品... 讚... 賜... 上... 賜... 治... 將... 賜... 物... 曾... 詔... 第... 四... 詔... 小... 是... 以... 天... 下... 亦... 慶... 命... 詔... 久... 冠... 位... 上... 可... 賜... 人... 曰... 治... 賜... 第... 五... 詔... 小... 以... 食... 因... 天... 下... 子... 撫... 賜... 慈... 賜... 波... 時... 之... 狀... 亦... 從... 而... 治... 賜... 慈... 賜... 未... 業... 上... 云... 大... 御... 手... 物... 取... 賜... 治... 賜... 久... 詔... 第... 六... 詔... 小... 卿... 等... 乃... 向... 未... 政... 者... 云... 白... 賜... 官... 亦... 治... 賜... 止... 白... 賜... 倍... 第... 十... 詔... 小... 是... 以... 教... 賜... 比... 趣... 賜... 何... 良... 受... 賜... 持... 色... 不... 忘... 不... 失... 可... 有... 表... 等... 之... 一... 二... 人... 年... 治... 賜... 波... 奈... 止... 第... 十... 一... 詔... 小... 親... 王... 等... 大... 臣... 等... 乃... 子... 等... 字... 始... 而... 可... 治... 賜... 彼... 一... 二... 人... 等... 與... 給... 比... 給... 給... 布... 云... 又... 皇... 太... 子... 宮... 乃...

官人... 亦... 云... 二... 冠... 二... 階... 上... 賜... 比... 治... 賜... 波... 久... 勅... 第... 十... 三... 詔... 小... 夫... 下... 奏... 賜... 比... 國... 家... 護... 仕... 奉... 流... 事... 乃... 勝... 在... 臣... 乃... 多... 知... 倚... 所... 亦... 置... 表... 三... 典... 天... 地... 共... 人... 亦... 不... 令... 悔... 不... 令... 穢... 治... 賜... 止... 宣... 云... 又... 為... 大... 臣... 子... 互... 仕... 奉... 部... 臣... 乃... 多... 知... 子... 等... 男... 波... 隨... 仕... 奉... 狀... 互... 種... 治... 賜... 比... 川... 禮... 女... 不... 治... 賜... 第... 十... 二... 詔... 小... 以... 遠... 乃... 政... 明... 淨... 以... 仕... 奉... 禮... 依... 而... 治... 賜... 人... 在... 云... 第... 十... 四... 詔... 小... 仕... 奉... 人... 等... 中... 亦... 云... 一... 二... 人... 等... 冠... 位... 上... 賜... 比... 治... 賜... 夫... 第... 十... 五... 詔... 小... 然... 以... 家... 乃... 子... 波... 朕... 波... 良... 何... 良... 仁... 在... 物... 予... 親... 王... 知... 治... 賜... 夫... 日... 仁... 不... 治... 賜... 在... 年... 為... 三... 奈... 第... 十... 八... 詔... 小... 是... 以... 天... 明... 久... 淨... 岐... 心... 以... 天... 仕... 奉... 方... 氏... 二... 門... 乃... 絕... 乃... 多... 未... 治... 賜... 止... 勅... 第... 十... 二... 詔... 小... 如... 以... 久... 字...

○日... 書... 卷... 三... 十... ○三... 百... 七... 十... 六...

治方夜夜時仁身命乎不惜之貞之淨心乎以天朝庭乎
護奉侍流人等曾治賜比哀賜倍物尔在止奈念第卅
四詔小以尔依天官位乎昇賜治賜都第四十詔小子孫
乃淨久明技心乎以天朝庭尔奉侍年乎必治賜乎第
十一詔小右大臣藤原朝臣遠左大臣乃位授賜比治賜
第四十五詔小汝等乃心乎等能直之朕我教事尔不
違之束祐治年表止奈以帶乎賜之詔第四十八詔小志
何仕奉狀隨五一二人等冠位上賜比治賜布第五十
詔小又一二人等冠位上賜治賜第五十八詔小然毛治
賜年所念之位止奈一品贈賜不子等乎二世王尔上賜

比治賜布尔尔有尔治ハ上上下下恩惠を施し給ふ
御事小云る不ふ右等の例共を集り見る小記傳十二
ガ敬奉て有状小後ひて其か上を能為るを云ふ云ふ
給ふ事共不ふ次小ハ武威を以て好邪を平らげ因憲を
以て刑罰を行ふ事を治と云う天孫降臨章小故大己
貴神中乃以平国時所杖之廣予授二神曰吾以以予
卒有治功天孫若用以予治国者必当平安と有是不
て其平国時と云ハ以一書小初大己貴神之平国也云
と有是其御事小て以夫葦原中国本自荒芒至及
磐石草木咸能强暴然吾已摧伏莫不知之有是不

乃大倭神社注進狀小傳聞八千戈神者大已貴命以廣
矛為杖令撥乎豐葦原中國之邪鬼是時大已貴命言曰
八千戈神之見元乃如く如く謂中治亂之事
ふくを以小吾以以矛有治功之宣以天孫小以以矛
治國者必多平安之申給へる即神武を示して天下
を御さし所在し坐べき旨を聞え知せ奉給へるふ
乃又刑罰の事を治之云々統紀第十九詔小玉等臣等
乃中無礼久逆在流人止在而討久大宮子將圍止
云而私兵備止聞看而加處須加處後所念止誰奴加朕
朝子背而然為流人乃一人母所在止所念後隨法不治

賜云第十九詔小是以勳法皆當死罪如以在慈
賜止為而一等輕賜而姓名易而遠流罪治賜都茅叶
四詔小是書乎見流謀反乃心何利明仁見都是以天法
乃未仁治賜止宣第四十三詔小是以檢法皆當死刑
未仁
罪由以互理波法未未岐良比給倍在利然止慈賜止為
互一等降互具等我根可婆祢替互遠流罪治賜止宣
布
第四十四詔小復清麻呂等波奉侍曹奴止所念已天
曾姓毛賜互治給之今波撤奴止之退給依奈云々
有之此小ハ具御罰の事を治賜と云々ハ先小賞奉
給ハ所治と有を以て下ハ略クれたる事か

右件共と同例あり第五十三詔不隨法斬乃罪亦行賜
之然思^保大御心坐^亦依而免賜^比奈太無賜^比遠流罪
^亦治賜^{波久}宣^止有^不何北^小法之甚^ハ律^一て刑
罰を行^ハ給^不御事^小申^セ共^{あり}
^{兵事}可^一雄略天皇九年御紀^小紀^小宿禰亦^收兵^共大伴
終^連等會^兵復^大振^共遺^衆戰^又舒^明天皇九年御紀^小
於^是敵^卒更^聚示^振旅^為擊^蝦夷^大敗^以悉^虜有^不振
字^を登^レ能^布訓^不漢^籍中^庸振^字を^收也^と注
ヒ^レ是^を以^テ兵^勢の^整振^ハ
事^小哀^佐牟^ハ云^ハ若^テ神^功皇后御紀攝^政
元年^ハ攝^政を^布佐^禰袁^佐米^給布^と訓^ハ天皇^小代
奉^給以^テ天下^ハ万^機を^守理^メ給^不御事^亦ハ
天皇^の御^上小^申マ^ル等^ハ其^仕奉^不事^ハ然^云
御依^ハ任^小各^其職^ハ

少崇神天皇四十八年御紀^小以^豊城^命令^治国^と云^事
有^ハ景^行天皇五十五年御紀^小以^彦狭^島王^并東^山
道^十五^国都^督是^豊城^命之^孫也^と見^エタ^ル是^ハ後
小^田司^ふの^任国^小就^と同^一事^{あり}孝^德天皇二年
御^紀詔^ハ大^夫所^使治^民也^と有^不是^{あり}万^葉十七^二
六^ハ於^保吉^民能^麻氣^乃麻^尔之^奈射^加流^故之^乎
遠^佐米^尔伊^泥底^許之^麻須^良和^礼須^良又^九十^憶保^根
美^能弥^許等^可之^古美^安之^比奇^能夜^麻野^佐婆^良受^安
麻^射可^流比^奈毛^乎佐^牟流^麻須^良袁^夜云^と有^テ即
其^御命^持と^為て^仕奉^不事^を云^{あり}又^其御^紀小^夫君

於天地之間而宰トシ万民者不可獨制トシ要須臣翼由是代
之我皇祖等共卿祖考俱佑朕復思欲蒙神護力共卿等
治之有文武天皇元年御記詔云以乃食田天下乎調
賜比平賜比天下乃公民乎惠賜比撫賜年止隨神所思
行佐久詔云是以百官人等四方食田乎治奉止仕賜
留田二宰等亦至麻豆云こと有と同義の文あるはて
以小治奉と有ハ上下小志志きて百官人等の天皇の羽
翼と為て各其職を掌と仕奉る事小云由右の二文
を合せ読て味ふ可し猶近くハ神祇令小允散爵之内
諸司理事如舊舊と有る理事ハ事務小仕奉る事を云小

てハ知これ職員令小太政大臣一人云ハ經邦論道ヲカム
理陰陽と有る義解小謂爽者和也理者治也言太政大
臣佐王論道以經緯國事和理陰陽則有德之選選非不掌
之職云こと見え左大臣一人掌掌理衆務云ハ惣判判庶
事上と有る衆務ハ庶事上を對ハ上理と惣判とを並並た
れハ其心して考合す可し其衆務を謂臨時大事也事
見元庶事を謂宮内尋常小事也預注されて内外共小
在ゆ臨時非常の大小事共小仕奉る事を理預とハ
云ふり惣判と字の換れらめところ有けれ其奉行ハ
仕奉るるハ状小於て異ふる所あり無りけり是下上

小仁奉事之哀佐年之云以上下之使令ハセ給
ふ御事之哀佐年之ハ云ふアリ以て世ハ言痛ク
言置ハ奉悌志信ハ如キハ悲ハ以哀佐年之云ハ唯
一信ハ敢ハて自コト上下ハ及不ハ又左右ハ及不
ハ後事不右ハ如ク以治之云事ハ上中下ハ互
リテ廣キ事不ハ崇神天皇六年御紀ハ百姓流離或
有疥癩其勢難以德治之是以晨興夕惕請罪神祇之所
見タラ以以德治之云ハ其四年小詔曰云今朕
奉兼大運愛帝黎元何当幸遵皇祖之跡永保無窮之祚
其群卿百僚竭尔忠貞並安天下之有是是ハ然ハ小
天下を治サセ給ハ事ハ其至德を流セ給ハてナリ病
難ウケケリ是以て請罪神祇之云ハ御政御在ハ坐ケ

ハふリ其七年小詔曰昔我皇祖大啓鳴基其後聖業逾
高王風情盛不意今当朕世數有災害恐朝無善政取咎
神祇耶蓋命神龜以極致災之所由也之有ハ其德を以
て治ラセ給ハ難キ故ハ神祇ハ質ハて其治ラセハ所
由を極メ所知看ヒトアリ然レテ御問ハ御事御在
ハ坐ケラ小是時神明憑御迹之日百襲姬命曰天皇何
憂同之不治也若能敬祭我者必當自平矣之有ハ
其ハ何ハ難以徳治之之云事を憂若サセ御在ハ坐ケ
若能敬祭我者ハ右ハ引テ古事記ハ是時有光海依来
之神其神言能治我前者吾能與相作成若不然者国難

成と有る如く天下を治る也御在り坐むハ先神祇
の御前を能治奉る也給ふしり起して国民ハ臨す也
給へるハ其神護の御力を副加て自ハ平安あり可き
事を示教へ奉る也給へるあり又其神を治奉る也給
ふハ其然為べき道有り所以ハ誨奉給へるハ是
夜夢有一貴人對立殿戸自稱大物主神曰天皇勿復為
然國之不治是吾意也若以吾見大田根子令祭吾者
則立乎矣亦有海外之國自多歸伏と有り是神の御前
を治奉る也給ふ時ハ天下自治りて海表の諸蕃の末
迄ハ自然ハ歸伏奉る可き御事を懇到ハ教聞えさる也

給へるあり然して其神教ハ後奉る也給ひて即以大
田根子為祭大物主大神之主又以長尾命為祭倭大
田魂神之主然後ト祭他神吉焉便別祭八十万群神仍
定天社田社及神地神戶於是疫病始息國內靜謐五穀
既成百姓饒之と有り其神祇を治奉る也給ひけるハ
因て已ハ天下ハ能治すハ證是なり然れハ唯善政
を天下ハ流行ふのそと 国土の自治あり可き者と思ふ
ハ實ハ生賢しき戒心ありて天下を治め国土を保
たせ給ふ第一義ハ神祇を敬祭りて給ふハ起る事上
ハ云る如く政の祭ハ根據く事ハ合也曉る可き者

巡造一御在一坐一ければ天下一獨立一御在一坐一て
復俱御在一坐一オド一由一を詔給一ハ一カ一て蓋
有之乎一益無之乎一の反語一者一ふり一り一右一ハ一云
カ一如一く理一天下一云一ハ一上一今理一以一国一と有一是一少一て
己一古事記一所見一たる御父一大神一の御言一意一礼一為一大
田主一神一而一其一我一之一女一須一世理一毘賣一為一嫡妻一而一於一宇一迦一能一山
之一山本一於一底津一石根一宮一柱一布一乃一斯理一於一高天原一冰一椽一多一也
斯理一而一居一是一奴一也一詔給一ハ一任一小一其一后一神一須一世理一毘賣一
命一ハ一亦一御名一を道主一貴命一と申奉一り一て後一の政一を聞食一
御在一坐一然一の一云一カ一大倭一神社一注進一狀一小傳一聞倭

大田魂神者大己貴神之荒魂典和魂戮一力一一心建一得一大
造之績一と有一て己一具和魂一大物主神一荒魂一大田魂神一二
柱神一共一具御一左右一小御在一坐一て相共一共一小大造一の功
績一を建得一カ一給一ハ一御子一神等一數多一御在一坐一て後奉
カ給一ハ一者一ク一或一ハ御夫婦一あり一又一ハ荒魂一和魂一不
り共一小大己貴神一御一身一御族一の一カ一て其一余一後奉
り國神一御皆一ハ一左一右一ハ具御趣一を仰一き一靡一り一仕
奉一り一カ一の一カ一て先一小益御在一坐一り一カ一彦名神
カ一如一く甚一止事一無一已際一カ一ハ非一カ一バ自然一小唯獨
立一カ一給一ハ一御勢一小多一カ一故一小以御言一舉一カ一物為一カ一也

給ふ事ハ至りて給へる者ありけり己ハ大八洲国を
然レ作巡り御在レ坐レ訖サセ給ハテ其本宮ハ
今一ノ遷入セ給ふ事為テ不意ハ然ル御言ハ
自然ハ出来フ可キ勢ハ亦止マレズ御事アリけ
リ然ルハ山崎垂加ハ唯吾一ハ而己者驕吾身之儀
而忘吾心之妙也云ハ口訣ハ蓋有之乎者
於得非得之端也云ハ何ナク御事アリヤ己ハ
得サセ給ヘルハ得タルアリ得サセ給ハレバ亦得
ざるアリ何ヲ然ル煩ハレキ御疑ハ御在レ坐レ
蓋有之乎ハ蓋ハ疑辭有之乎ハ無之乎の反ハ見レバ
甚自ハ明ルハ蓋ハ疑辭有之乎ハ無之乎の反ハ見レバ
を説ク事ハ委一ルメアリ ○是時云ハ右ハ御言
拳ハ就テ外ハ神御在レ坐テ事を示レテ現出サセ給
ヘルハ其ハ女ハ文意ハ景行天皇十八年御紀ハ列阿蘇

田也其田郊原曠遠不見人居天皇曰是田有人乎時有
二神曰阿蘇都彦阿蘇都媛忽化人以遊詣之曰吾二人
在何無人耶故号其田曰阿蘇云有ハ似たり歟ハ天
皇ハ是田有人乎と詔給ヘルをセリ奉リテ忽ハ其田
神の形を見ハレテ吾二人在何無人耶と對奉レレ
と歟ハ大己貴神の其可與吾共理天下者蓋有之乎
詔給ヘルハ對ヘテ今迄躰身不レズリ神の現レテ
其御言を拜ヘテ御名兼為ラセ給ヘル事ハ異
なり不レズリ同レ趣ル所アリ其心レテ見レバ
御言拳ハ神の忌給ハ事と見エテ其四十年御紀日本
武尊東征ハ御時ハ亦進相撰欲往ト総望海高言曰是

日本書紀卷三十一

小海耳可立跳渡乃至海中暴風忽起王船漂蕩不可
渡云云有海神之心為其王を悩ませ奉れり
事有き但右等此一云云非れども一度言を成
れば隠れり神の聞食一神在り坐て其言の状小隨
ひて行ふ事有を畏む○神光ハ雄略天皇前御記小天
皇產而神光滿殿と共小阿夜勳伎比加理と訓り神の
御身より放たせ給ふ光華の靈異多由あり偕天照
太神の大御光御在り坐て天地の間を照徹せ給ふ
御事ハ一も本より日神の渡り給へれば他小並
坐り神の御在り坐ざる御事申すも更なるを猶自餘
の諸神の御坐り更ふり現人神の御身より右の如
く神光を放たせ給ふ御事御在り坐り猶古書中小見

元なる二三を抄録すむハ天孫降臨章第一一書小
時味輕高彦根神光後花艶映干二丘二谷之間と見え
又猿田彦神の御事を旦口元明耀眼如八咫鏡而絶然
似赤酸醬也と有り其を古事記ハ居天之八衢而止
光高天原于光葦原中国之神於是有り書されたるを
以て其御有状を想像奉る可し又神武天皇戊午年御
記小天皇云々至吉野時有人出井中光而有尾天皇問
之曰汝何人對曰臣是国神名為井光と有ふども是止
事無き際ハ非れども其身ハ光有り又後記延暦十
八年の下あり和氣清麻呂卿傳の中ハ宇佐神宮託宣

△又大徳天皇実録
 大奈母知少比古奈命
 の東海に大洗磯面
 の依永坐を御事と
 夜半望海光耀腐
 天明日有兩怪石見
 在水次に見えたる

の御事を書して清麻呂祈曰今大神所教是國家之大
 事也託宣雅信願示神異神即忽然現形其長三文許色
 如滿月清麻呂魂失度不能仰見云々有は其御光
 の御在坐て滿月の如く見えたり給へりなり如以
 の矣猶哉許し布を況小以現れ給也御在坐て大
 神ハハ其是の等々天神ハ御在坐てハ其御光不
 尋常ありずして妙ハ奇異ハ御事ハてハ御在
 坐けりハ其ハ右ハ往てハ雄略天皇の産而神光滿殿
 殊更あま御事ありを允泰天皇七年御記ハ委弟名弟
 姫烏弟姫容姿絶妙無比具艶色徹衣而冕之是以時人
 号曰衣通即姫也と見えたり如日人ハ御在坐り以
 して神等ハ御身ハ光を放たせ給ハ尋常ハ

て奇珍と知り可しハ○照海忽然有浮来者ハ古事記ハ
 ハ是時光海依来之神と見え地神本記ハ于時神光
 照海忽以踊出波浪末為素装束持天鞋槍有浮来者
 と有て殊ハ安曲ふる者なり以照海ハ宇那波良袁氏
 良斯氏と訓来れりハ從ふ可ハ海官遊行章茅七一書
 ハ豐玉姫自馭大龜將女弟玉依姫光海来到古事記玉
 垣宮段ハ其肥長比賣患光海原自船追来ると見え
 たる是其例なり私記ハ神光照海を加美字美尔天
 利天と有れども古言ハ聞え
 り神光を唯加美との訓ハ時ハ光字を置り事更
 ハ由無く且照海ハ右の如く光海原ハ古事記ハ
 見えたりハ○忽然ハ例の多知麻知尔ハハ以ハ

言を置るこ大小事の迫切れ多意味見えて力有る
所なり然るこ右小今理以国唯吾一身而已其可典吾
共理天下者益有之乎と獨言為させ給へりける其御
言を登揚ダ給ふや否其御言の未竟させ給へりける
多程小直小其御言の應へて立処小神の現れ物為
させ給へり趣ふむ以忽然の語め有少て炳然りりけ
り地神本紀小忽以踊出波浪末と有少て其速を
りける御事を思ふ可こ今迄小幸魂奇魂と為て其大
己貴神の御止小副て御在一坐一其大造の功績
ハハ其御一己の御力めて成就れる者と所思して

△又古事記の坂段中
照比賣之哭声共凡
御言到天と有又

然る御言攀ハ為させ給ひけりりこ外小斯る大神
の御在一坐一て然令成給へり御事を示し聞えさせ給
ひむと為て忽小御形を現ハ一出一させ給へりりこ御
在一坐一けり一實小天雲の五百重りとの高天原小御
在一坐一了大神小坐せども天放り遠き其国めて御
言を攀りさせ給へりを聞者し知して忽然小斯る信驗
の御在一坐一を以て小実小可畏こ恐惶多可き御事を
思ふ可くふむ有ける一殊と事ハ別ありと虽も天孫降
射斃一たり所小其矢同達雉胸而至高皇產靈等之座
前也時高皇產靈等見其矢曰云云於是取矢還投下之
其矢落下則中天稚彦之胸止云云中矢立死と見え△神
武天皇戊午年御紀小天皇熊野荒坂津かて丹敷戸畔

○日本書紀傳三十

○三百八十九

合原稻を詔ふ天
 高懸舟の詔見え先
 子ノ詔ヲ人生天北
 氣中ニ動作呼吸息元
 于天地為善為惡家
 皆靈之加謂謂神
 神見我形一知謂神
 鬼國我身云々有
 行り

云者を誅治ふ所の時神吐毒気人物咸瘁と有と彼
 処有入号曰熊野高倉下忽夜夢天照太神謂武甕雷神
 曰夫葦原中国狝野高倉下忽夜夢天照太神謂武甕雷神
 曰有^神神靈劍を降して其荒神を言向う世給へるを
 して天の遠きも神祇の御止りてハ近く有る御事小
 可^神慎^神○有浮来者ハ古事記小有依来之神と有小合
 せて宇加毘伎多流神麻世理と訓べし以下小初少彦
 名命の依来坐一所小隨潮水以浮到と有ハ以白藪皮
 為舟と有小依てふり以ハ海止を唯小歩行つと御在
 一坐るふりむ小川神武天皇戊午年御記小三毛入野
 命の御事を則踏浪秀而云と有ハ如く有べき小浮
 来マ^神書これたると天石船ふど小乘り御在^神坐

けろ小ころ浮ハ多く船の事小云例少て己小以第五
 一書小ハ船を浮宝と云々由傳十八^神小注るカ如
 一万葉一^神小真木佐苦櫓乃孺手半物乃布能八十
 氏河尔玉藻成序倍流礼其半取壹散和久御民宅家忘
 舟毛多奈不知鴨自物水尔浮居而と有る浮倍ハ筏を
 水小浮^神分り浮居ハ其筏小乘る事と云ふり又^神二十^神德
 田乃泊瀬乃川尔船浮而二^神四十^神小次来中乃水門從船
 浮而吾榜来者十九^神三十^神小天雲尔磐船浮等母尔倍尔
 真可伊繁貫伊勢都追国看之勢志氏ふと有と始と
 して其例舉る小違有ず^神船を海中小榜行いし為ると
 船浮居と叙之船中ハ病者乃

事を浮宿と云ハ船中ハ在る事を水外浮居而又ハ海
尔浮居而云々常ありけれハ其ハ浮居と云テ船
中ハ御在り坐了御事 備以浮居と也給ハ大神の御事
と何と云ハ見ざるむ 出雲国五十狭三之少江と有
る地神本記ハ據るハ 出雲国五十狭三之少江と有
て以ハ少彦名命の依来坐ると同地ありふ就て心得
有り其神の御事ハ一傳十九四百八十九丁ハ注るが如く
其始伯耆国會見郡天萬郷ハ天降り御在り坐りけりハ
當昔其太己貴神の御在り坐了出雲国出雲郡宇迦本宮
ハ一ハ島根秋鹿楯縫出雲と四郡共ハ一列の島ハて
在りハ海を浮びて渡到り御在り坐るふり然ハ
て以る幸魂奇魂神の如以浮到り也給へるハ然ハ

不意く海上より現れ給へるハ非ず又海外ハ御
在り坐たり和魂の歸御在り坐たりと云説ふどの状
ハハ本より非ず御事ハて以ハ其本著る所必
御在り坐べき御事ふ可きハ心を著て漸ハ見
得たりけり其ハ上百九十丁ハ引て粗注ヤる播磨凡土
記美囊郡志深里坐於三垣神八戸 桂須御諸命大物
主葦原志許田堅以後自天下於三坂奈と云事有る以
ハ戸桂須ハ御諸と云ハ料ハ發語ふり御諸命と申す
ハ以ハ吾欲往於日本国之三諸山故即管宮彼處使就
而居と書るハ古事記ハ以者坐御諸山上神也と有る

是れ即大己貴神の具地小角奉給ふ由の御名なり
次小大物主神の具神小属て具三輪小鎮の御在
坐和魂神あり次の葦原志許乎命の即大己貴神小
て渡り給へるが以て具大三輪三社の中小御在
坐事傳十九七十の内己内住るが如し若て国堅以後
云ふ以て夫葦原申国本自荒芒至及磐石草木成能
強暴然吾已摧伏莫不和順と興言為給へる昔
己小国土を作堅め託さる給へる御時あり是なり自
天の高天原より降り下於三坂岑と云ふ以て始て天
降り著せ御在坐けり由なり然して出雲の五十狭

小江小御在坐の日本より船を浮べりて御在
坐て渡り御在坐へる御事と同一状あり共の以て大
日本より天降坐て御船かて物為りて給へるなり有り
不斯以て其より以前も七の播磨国の降りて御在
坐けりが始て其の御形を現わして出向ひ給へり
一若ありて一神名式の中播磨国美囊郡御坂神社と
所見たり是なり又云二百十丁の御坂の防国佐保
代主神二柱の御在坐を同郡御坂神社と所奉大田
主神の渡り給へる由社傳あり其の所以有るは非
なり考ふに下諸石の奥の如く地神本記の以て
を干將神光照海忽以踊出波浪末為素袋束持天鏡槍

有浮歸來者之有ハ殊ハ委曲多備あり実ハ御賜物
ありけり其波浪未ハ古事記ハ名昆古那神の依來坐
ヲ所ハ自波穗乘天之羅摩船之有之記傳十二ハ波
穗ハ万葉十四ニハ奈美乃保能伊多夫良思毛共波
之是振之有ハ依て訓べハ言卷末ハ板十掬劔運
刺立于浪穗云ハ野毛沼命者跳波穗云ハふと見ハ書
紀神代下卷ハ於秀起浪穗之上起ハ尋殿云ハ秀起ハ
云ハ左岐陀互孺又神武天皇御卷ハ浪秀之有ハ凡て穗
之ハ著明ク現ハれ見ハる事云ハ波穗ハ書記ハ秀
起ハ有ハ如ク浪ハ白ク高ク立フ状云古言ハ

又神代卷下十年御
紀又欽明天皇十年
御記ハ歡喜踊躍
舒明天皇御記ハ
躍歡喜ハ有ハ踊躍
を宮布麻志理ハ
御同走の事ハ有
止ハ卷末ハ御記
躍ハハハハハハハ
道ハハハハハハハ
ハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハ

ハ有ハ通えたり踊出ハ哀杼理伊得氏又訓ハ下
ハハハ名命の跳蓋其類ハ有ハ跳ハハハハハハハハハ
是ハ慷慨之得ハ堪忍不可ハハハハハハハハハハハ
跳出テ其意を述べ又其思を見ハハハハハハハハハハ
傳ハ踊躍又世踊文選ハ踉跳を哀杼理阿賀流ハ訓ハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
五卷四十ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
奈美吉ハ有ハ哀ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
心ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
逆ハ有ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
哀以送ハ素裝束ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハ大神等ハ著ハ世給ハ御腹ハハハハハハハハハハハハハ

謂^フ扇^ノ殿^ノ御^ノ衣^ハ一^ト神^ノ宮^ノ神^ノ衣^ヲ祭^ニ朝^ノ家^ノ大^ニ
嘗^ニ祭^ノノ起^ル原^ヲあり由^テ傳^ヘ十九^ニ丁^ニ二十^ニ丁^ニ十六^ノ住^セる如^ク
くあり其^ノ荒^ク妙^ク和^ク妙^クノ御^ノ衣^ハ共^ニ白^ク色^ニありを以^テし
知^ルべき者^{アリ}衣服^ハ令^テ白^ク黄^ク丹^ノノ集^メ解^シ我^レ朝^ヲ以^テ白^ク色^ヲ
貴^ク色^ト天皇^ノ服^也と釋^スされたり紀^ノ略^ハ弘^仁十^一年^正月^也
甲^戌朔^詔曰^ク其^ノ服^色大^小神^事及^テ季^冬奉^幣諸^後則^帛衣^也
之^布を^帛抄^ハ帛^御裝^束着^御事^即大^内之^時一^度召^改
御^裝束^と布^を一^本白^御裝^束と見^えた^多如^くい^て
天皇^ノ御^禮服^と虽^も異^し唐^戎ノ^風ハ移^ろい^た
れども大^社以下^格別^ハ止^事無^き御^時ハ猶^も神^世ノ

凡^後を^重し給^ハ入^テ生^御扇^服帛^御袍^を著^御せ^られ
給^ハ御^事西^宮記^{以下}ノ諸^抄ハ所^見たり太^神宮^式ノ
三^時祭^ノ時^禊宜^乃著^明衣^と書^{され}後^ハ文武^官兵^共
ノ神^事ハ用^テ淨^衣と^り無^丈ノ^素服^と皆^グク
か上古^ノ風^後ハ據^テ事^{あり}故^{あり}但^神代^と虽^も
色^服ハ本^{より}有^し事^{あり}古^事記^ハ千^矛神^御歌^ハ里^ノ
衣^青衣^又岳^深ノ御^衣ノ事^を詠^セ給^へれども其^ハ
藝^衣ハ一^テ御^事問^ふど^り尋^常ノ御^時ハど^{ころ}ハ御^事
在^し坐^けめ猶^も常^陸風^土記^ハ殊^更ノ白^色を^云を以^テ
て^も貴^色と^為され給^ハ一^御事^ハ知^らる^ゆり万^葉四

〇月^奉書^記備^三十

四十 復毛將相因毛有奴可白知之我衣乎二肩留目
六十五 三十一 之呂多倍能安我之多其言毋字思奈彼
受毛互礼和我世故多太尔矣布麻低尔と有ふど右
小謂ゆり淨衣の类と聞えたり天麩槍ハ八洲起元章
小所見たる天之瓊矛と同一物にて天神の御物あり
是一事を以て之を幸魂奇魂ハ大己貴神の和魂
の離故とせ給へるが傳未坐る由云説の非ふを
知べし己の二柱御祖神の御時ハ其天神の御詔許あり
天神より直り彼天之瓊矛ハ一事依一授聞えさ
給へるを次ハ大己貴神ハ一事依一授聞えさ
給へるを次ハ大己貴神ハ一事依一授聞えさ

せ給へれば天神より直り授りて給ふ可き由無きを
御父大神より生大乃生弓矢を賜りて大田主神と所
在し坐す是即皇祖天神の御依りありければ今迄ハ
其神の相成御在し坐て共くハ相成し御在し坐ける
を具事ハ所知食ずして己命御己の御力にて成
れる者り如く御言奉為さし給へる故ハ更ハ驗身と
現出させ御在し坐と為て其天神の正身ありて其ハ
見えさせ給へる者ありけり但然り時ハ大己貴神の
顯れ出させ給へるの事見ゆ物あり然ハ非ず其
ハ幸魂奇魂と為て預て相致し給へる事を御聞え
させ給へるハ此神の御所業ハ皇祖天神の相宇
豆りし御在し坐て即給へる御事を教へ聞えさせ給

○日本書紀傳三十一

○三百九十五

へる公（ある）を天神の因准（いんしゆん）のて給（たま）ひたりし世の自
 立給へる如く云り古義（こぎ）の晴き者の私言（しげん）ありけり
 云のい豆（まめ）きる者（もの）の事天孫降臨（あまのみことくだり）章國（あまのくに）の所（ところ）の相
 忘く昔有と雖（いふ）も此の容易く尽（つ）す下（くだ）り非れり次（つぎ）の相
 説明（せつめい）し ○如吾不在者（ごとくわがなかりぬるもの）の下（くだ）る平（へい）以國平（くにをへら）を私託（しやくたく）の古
 乃久尔乎平介末之也と有の引合せて如吾伊麻佐耶
 良麻志加潔と訓べし今理（いま）以國唯吾一身而已（くにをわがひとりで）と宣給
 へるの對へて其の吾御在下坐て其御功業を助成
 させ御在（ま）し坐て云事を甚く慷慨（こがい）として詔給へる所不
 るが故（ゆゑ）の強（つよ）めて反語（はんご）を用ひさせ給へるあり在
 字を伊麻須と訓ひ事古書の例（れい）ありと為す推古天皇
 八事御紀の天上有神地有天皇と有る二の有り字の然

公神功皇后三年御紀
 伊麻須之能知勢等
 唐祿珂伊麻須

公十五比等久尔
 伎美乎伊麻須

訓べり古言の格あり公万葉二（に）七（しち）の八百萬千萬神之
 神集ニ座而云々天雲之八重撥別而（一）云天雲之神下
 座奉之云々天原石門乎同神上座（一）云神登座又
 三（さん）十（じゅう）吾意流妹者伊座等又（四）十（じゅう）汝意妹座等三（さん）十（じゅう）小
 九（く）十（じゅう）都智奈言（みやま）大主伊麻須又
 云（い）五（ご）九（く）十（じゅう）神豆麻利宇志播吉伊麻須六（む）十（じゅう）小乎
 抱而我者將御在十三（さん）十（じゅう）小恙無福座者（六）十七（じゅうしち）小須
 賣加未能字之波伎伊麻須十九（じゅうきゅう）十（じゅう）小船乃信尔宇之（三）十（じゅう）須
 波伎座船騰尔御立座而二十（にじゅう）十（じゅう）小己麻勢波（六）十（じゅう）小刀自
 於米加波利勢受る（と）獨有べし儀式追雖後（九）十（じゅう）小乎（久）於
 太比尔伊麻佐布倍志（登）申と見り諸以伊麻須（今）

○日本書紀傳三十

○三百九十六

坐の引合ひて唯の坐と云ハ大凡るを伊麻須々云
時ハ現ハ其御在ハ坐才事を慥ハ差定めて自他共ハ
云事あり伊勢物語第三十九段ハ昔西院の帝と申ナ
伊麻曾り御門御在ハ坐けり具帝の御子繁子と申ナ
ありと云ハ今現ハ其処ハ神靈の感格して御在ハ坐
云ハて是切ハ近ク見たりあり生存の字と云ハ然則
ハ考合たり又一種伊麻須々 ○何能ハ伊加傳加毛
云て往坐の事あり別あり
典久と訓ベハ垂仁天皇十七年御記ハ吾手弱女人也
何能登天神庫耶と有と同ト支格あり古事記ハ此類
是大田主神愁而告吾獨何能得作以国と有ハ何字ハ
伊加傳加毛と訓ハ所ふり其ハ能得作の三字を延

都久良牟と訓ベハ由記傳ハ説有て止十六ハ注セ
如くありハ何能と字ハ向トさるる所ハ状ハ隨ハ
て其訓異ふハ屢ハ籍ハハ争字と云ハ訓ハ何ハ然ハ有
いと先ハ人の言を漏て双方の意を立つ所ハれハ自
然ハ争ふ事と云ハ然ハ右ハ大己貴神ハ獨能
巡造るハ館へると所思ハ言立給へると漏ハ如何
でハ然獨能造成ハ給へると吾御在ハ坐ハ因ハ云ハ
と其進ハ健ハ給へると御心を押ハ云ハ給へると所あり
和訓奈ハ伊加傳加波ハ真字伊勢物語ハ如何ハ是ハ波
と填ハ然ハハ加ハ如ハ略ハ可ハ云ハ云ハ然ハ
実ハ然ハ言 ○平武田平ハ私記ハ古乃久ハ平平今末
あり者あり

之也。有る依べし。諸本共く平乎を字部麻志耶と刻
る。然る言の在れど。猶以ハ多比良麻志耶と
云。方緒の整ひふい且しく見えたり。けり。以ハ下ハ初
大己貴神之平国也云し。有る其御事を以ハ荒魚中
国本自荒芒至及磐石草木威能強暴然吾已摧伏莫不
和順と有て天下の是能治れり状なり。天孫降臨章子
乃以神の御言の吾以以乎卒有治功天孫若用以乎治
同者必多平安と云有る如く八子女神の武威を以て
天下を平しけり鎮治さる給へる物なり。以ハ天神
の如者不在者何能乎以因乎と詔給ひて其令治乎給

へり御事を示教ハ聞えり給へる者なりけり武威
を以て奸邪を摧伏せ給ふ事を平と云り神武天皇已
卯年御紀の備舟楫蓄兵食將欲以一舉而平天下其以
午年小吾必不假鋒刃之感坐乎天下又崇神天皇六年
御紀の神託の天皇何憂国之不治也若能敬祭我者必
當自平矣云々其十一年小四道將軍以平戎夷之状奏
焉是歲異俗多歸国内安寧景行天皇四十年御紀の日
本武甕雄詔之曰熊襲既平未幾年今更東夷叛之何日
逮乎太平矣臣虽勞之彼平其乱仲哀天皇八年御紀伊
觀縣主五十九述乎の奏言の中ハ乃提十握劍平天下と

△地神本記の若
くは我者何故得
て天造之績を
と有り候

有る矣攀方小違非不地神本記の然を汝何能得平
治坂田平と有る季しき小過と古語の跡き状あり然
ハ平治を年気志豆年流と有る当れらあがし得平治
の三字を小坂の如く多比良直麻志と訓て有ぬ可
其平を年気と訓ひ事ハ佛三巻百六十一
丁初大己貴神之平田也の所ハ云べし○由吾在故ハ
上の例ハ吾伊麻須尔由氏許留と訓べし先ハ如吾不在
者云と詔給ひし具田平の御事ハ於てハ悉く其即加母有由を諭給
ハ以ハ小ハ吾御在し坐ハ由て天下を能造成さし給へる具也一助守
セ御在し坐すハ依て其御功業を成さし給へる御事
を述さし給へる者あり○得建具大造之績ヒメテ其大造
ハ私記ハ於保興曾と有り即凡ハ義あり万葉七

小凡尔吾之念者十一十六ハ凡者誰見鴨又十九凡
吾之念者十二ハ小凡尔吾之念者ふどの凡ハホコノ又ハ凡
可カと唯於保とハ詠多例有を此考る小大列オホコの受ハ
て涯分カキリとハ餘れら謂あるを以て跡略オホコあり事ハ用
ふるありけり然れハ少彦名神の御在し坐す成て後
ハ其勢の折け給はずして獨能巡造し給ひて今
右の御言攀ハ及び給ふと云ハ己ハ不足ぬ所無
く成訖させ給へる意以て詔給へるむを幸魂奇魂ハ
御神イリハ其ハ小超させ給ふ許り令成給へる意不
る可く所見めり績ハ私記ハ功平イワテと有る以ハ古訓伊

△古語拾遺の推根
津彦延引皇舟表
讀香山之巖又唯
序當年之序不本
天降之續有二三
續を以て同く刻す
共

△新小大造乾坤圖
又見又左傳成十
三年少則是城有大
造王也と有る巨の
造成也言晉有城
却於春也と云ふ

多波理ふ欽明天皇十五年御紀の御紀可成功推古天皇十四年御紀の御紀可成功
有る功字を以て訓今至張の義以て其功業の大も至届
くを云ふ然れは勞字を訓然るも其義同く又伊多
豆伎と訓も至竭の義以て共小一ある可く所見たり
説文小以勞定目曰功と見え字鏡集小功を以伊多豆
伎と訓和訓伊多波流ハ勞を云ふ人の勞を勞
として勞らふを以て痛むを治り云辭ふも可く真
名伊勢物語小勤を訓り有り但痛むも至起れ
るも多可けれハ本末違ふ可く諸纂疏小大造者造為
天下之大也續功也と注させ給へる然る言ふ
又谷重遠ハ大造之續謂經營天下之功也と云う諸得
建ハ延多岐多礼と訓して孫係れ多許曾の結を成
す可き事云△右の如吾不在者汝何能平以因乎由吾
く更あり△在故汝得建具大造之續矣の文ハ田平の御政と田造

の御事とを並奉て其御功業を悉く小助成し給へる
由を示し教ふ也給へる所ふか古事記の御成無
くして能治我前者吾能共共相作成若不然者田難成
の御言を被載たり何れも異傳ふると見以行く小同
く一聯の語ふるを互小相脱せりあて 以小相續く文
ありけり然るハ以小始て御形を現ハクさせ給へる上ハ
必其治奉り以後の事を詔ひ掟させ給わずハ得有
べくぞ理ふを思ふ可く知して御名を今問し
幸魂奇魂の御在し坐す由を告聞えさせ給はむとの
御事こころハ所見たりけれ但其語の上小於是大田

主神愁而告吾獨何能得作以用孰神與吾能相作以因
耶と云文有ハ上十六ハ住カカ如ク其ハ少彦名命の
常世郷小渡り御在り坐ける時の御歎ふ其孰神與
ハ少彦名命の如ク何神を以俱ハ為させ給ひむと
云義ありければ甚己さ程の御事少々ハ自後國中
所未成者大己貴神獨能巡造と云ふハ送カ以前の御事
あるを其より疑けて是時布光海依来之神云と有ハ
決めて其間ハ脱文有ハ故ふり其所の凡ての事ハ御
記の方甚委カウリければ其本と為て古事記ハ其
欽の補ふのそ有ける又右の若不然者因宿成次下

ハ其者坐御諸山上神也との有て其正身ヲ知ルル
事ハ給ハズ不遺憾ハ又其幸魂幸魂の御
事ハ委曲ふるハ宜ハケレども其幸魂幸魂の御
三輪之神也と書されて大物主神と思ハケル物為
るれたると事違ハて其ハ甚ク別ありける神あるを
正るれごハ後世の惑をハけるハ亦其一
事ハ是不我前ハ記傳十二十九ハ凡て古言ハ神ハ
足て不い前云事多ハ其卷末ハ天照太御神の詔ハ如拜吾
前伊都伎奉又思金神者取持前事為政中卷水垣宮段
ハ天皇ハ大御夢ハ大物主神ハ詔ハ令祭我御前者神
氣不起云て同段ハ於御諸山拜祭意富美和之大神前
と見え龍田風神祭詞ハ龍田能立野ハ小野ハ吾宮ハ波
定奉互我前子称辞竟奉者云ハハ見ハ中ハ唯事

い無く其神の御前と心得て有べし。有れども又常
の云ふ前の意にて、少く通え難き。有る故思ふか
前の座クラと申して、本其神の御座位を指て云言ふり
儲御座位を指て云か。即其神を指て云ふれ。治我前
とい。即治我と云言ふり。中昔の言ふも、貴人を指て意
麻田と云う。今世の御前ゴゼンと云ふ。是れ同し。又中頃婦
人の名、ナニハナニ某前某御前と云ふ。聞下と有る。甚能聞
えたり。能治ハ善祭ヨクマツルあり。上三百七の記傳を引し。注る
か。如く宮を造営して、齋祠を治と云ふ。り。以次ハ
然治奉之。状奈何。答言。吾者伊都岐奉干。倭之青垣東山

と有る。治奉と伊都岐奉と互ハ相直して、曉る可き者
ふ。ふむ。吾能共典の能ハ、軽く見へ右の能治我前と有る。對へれ
ハ眼と有る。所あり。記傳ハ共典ハ、登毛登毛と訓入
其證ハ六帖ハ共と。思来つれど、鷹かねの同ト里へ
も歸る。ざりけり。後撰集ハ、ハ背うれぬ。松の千年の程
より、共と。だふ慕われ。返り共と。慕ふ疾
の添水ハ如何。ふら色ハ見えて行く。むと見ゆ。今世ハ
も常云言ふ。り。と所見たり。相作成ハ、我御前を能斎奉
り。給ハ。我能共典ハ、御力を添と相成。給ハ。むと
ふて。以如吾不在者何能乎以因由。吾在汝得。其大造之績矣。と有る。以神り



坐す御事と成れるふむ仰ぐもの猶餘有る御事の
 有ける然るを世の僻めり輩の多く有て其己を欺き
人小誇り學を街に世を誣る自の心の引競べ
て大己貴神を以て然る一人の列小見成
奉りて右等の御言共を以て不遜り漫言と為る具罪
去所無き妖言と云者あり豈然る小き心を以て則奉
り知る可き事ふりめやの神慮如何有む畏る可く
慎む可き事
事共ふり
 ○是時大己貴神問曰然則汝是誰耶の然
 則其神の御言の如不在者云く由吾在云くと詔給
 いて相共共小物為させ給ふ如く詔給へるが不審し
 く所思す小依て問奉る也給へるかて次小唯然延知
 と云小係合ふ文あり汝是誰耶の汝者多礼叙登問給
 問際と訓附べし以時ハ大己貴神を除て其上小勝給

